

論 文

# 対人不安と自己没入および共感的配慮との 関係に関する研究

川口春奈<sup>1</sup>・古賀靖之<sup>2</sup>・平川忠敏<sup>3</sup>

(西九州大学臨床心理相談センター<sup>1</sup>, 西九州大学<sup>2,3</sup>)

(平成29年9月29日受理)

## A Study on the Relationship between Social Anxiety and Self-Immersion and Empathic Considerations

Haruna KAWAGUCHI<sup>1</sup>, Yasuyuki KOGA<sup>2</sup> and Tadatoshi HIRAKAWA<sup>3</sup>

(*Nishikyushu University Clinical Psychology Consultation Center*<sup>1</sup>, *Nishikyushu University*<sup>2,3</sup>)

(Accepted September 29, 2017)

### Abstract

The purpose of this study, intended for students majoring in welfare, social anxiety and self-immersion, is to verify the relationship of empathy considerations. Nishikyushu University was conducted a questionnaire survey of fourth grade from the Health and Welfare Department of first-year students. As a result, 327 copies were collected, and 270 copies of valid responses were excluded from entry or no answer (Men 156 people, female 114 people, average age 20.13 years). As a result of the analysis, there was a positive significant correlation between social anxiety and self-immersion, also there was a positive significant correlation between self-immersion and empathic consideration, but there was a negative significant correlation between social interpersonal anxiety and empathic consideration. The relationship of the degree and intensity by grade and sex was different, the result was different from results of the conducted among nursing students previous studies have been found. From the above, the characteristics of students majoring proficiency and welfare professional learning would be involved.

Key words : social anxiety 対人不安  
self-immersion 自己没入  
empathic consideration 共感的配慮

## I. 問題・目的

対人恐怖症とは、ある特定の対象や場所に対して極度の不安を生じ、生活に支障をきたしてしまうような症状を持つ恐怖症のなかのひとつである。DSM-5 (2014) では対人恐怖症のことを、「社会的交流において、自己の外見や動作が他者に対して不適切または不快であるという思考、感情、または確信によって、対人状況についての不安および回避が特徴である文化症候群である」と定義されており、対人不安と対人恐怖は同等の意味で使用されている。

次に自己没入について、坂本 (1997a) は、自己への注目を持続させやすい特性を仮定し、「自己に注意が向きやすく自己に向けた注意が持続する特性」として自己没入という概念を提起している。

共感的配慮とは、他者に対して同情や配慮をしやすい傾向のことである。Davis, Mark.H. (1999) は「共感能力をもっている人は、思いやりのある、他人中心的なスタイルを反映した行動を示すことになり、よいコミュニケーションができる」と述べている。

対人不安、自己没入および共感的配慮に関する先行研究として、高橋ら (2003) の看護学生の対人不安と内的属性との関係や高間ら (2002) の看護職者の内的属性の対人不安への影響などが報告されている。

しかし、これまで対人援助に携わる専門職や学生を対象として、対人不安や自己没入、共感的配慮の3要因に関する研究はほとんどされていない。しかし、この3要因は対人援助に携わる者に対して、無関係ではないだろう。したがって、本研究では福祉を専攻する学生に焦点を当て、臨床心理学的視点から対人不安と自己没入、共感的配慮の関係について検証していきたい。また、性別及び学年別の検討もあわせて行っていく。

### 仮説

1. 対人不安と自己没入は正の関係である。
2. 対人不安と自己没入は正の関連がある。
3. 自己没入と共感的配慮は負の関係である。
4. 自己没入と共感的配慮は負の関連がある。
5. 対人不安と共感的配慮は正の関係である。
6. 対人不安と共感的配慮は正の関連がある。

## II. 方法

### 1. 調査対象

西九州大学健康福祉学部1年生から4年生を対象に質問紙調査を実施し、その結果327部が回収された。しかし、記入漏れや無回答を除外すると有効回答数は270部(回収率:82.6%, 男性156名, 女性114名, 平均年齢20.13歳)であった。

有効回答による学年別の内訳をみると、1年生62名、2年生89名、3年生54名、4年生65名であった。

### 2. 調査期間

2016年6月20日～2016年7月4日

### 3. 調査内容

(1) 対人不安の測定:堀井・小川(1996, 1997)の対人恐怖心性尺度

この尺度は6つの下位尺度について5項目ずつの計30項目で構成され、7件法で評定する尺度である。

(2) 自己没入の測定:坂本(1997b)の自己没入尺度

この尺度は11項目で構成され、5件法で評定する尺度である。

(3) 共感的配慮の測定: Davis, Mark.H. (1980, 1983)の対人的反応性指標の日本版の下位尺度である共感的配慮尺度

この尺度は7項目で構成され、5件法で評定する尺度である。

### 4. 調査手続き

調査実施に協力頂ける教員に事前に了解を頂いた上で、講義終了後に事前説明を含めて15分程度時間設定を行い、健康福祉学部の学生に質問紙と同意説明書、参加同意書等を配布した。その際、文書及び口頭で本研究についての説明を行い、研究参加への同意を得られた者だけに調査を実施した。

### 5. 分析方法

結果の分析は相関係数、偏相関係数及び標準偏回帰係数を算出するために、IBM SPSS Statistics 23を使用した。また、対人不安下位項目と自己没入、共感的配慮の因果関係を見るためにAMOS Graphics 23を使用し、共分散構造分析を行った。

### Ⅲ. 結果及び考察

相関分析の結果を図1～3、偏相関分析の結果を図4～6、重回帰分析の結果を図7～9、共分散構造分析の結果を図10、11に示す。

#### 1. 相関分析と偏相関分析から見た対人不安と自己没入の関係

図1～3の相関分析の分析結果より、対人不安と自己没入に関して、全体及び性別、学年別の全てにおいて0.1%水準で中程度の正の有意な相関が見られた ( $r = .487 \sim .632$ )。また、図4～6の共感的配慮の影響を統制した偏相関分析の分析結果も同様の結果が得られた ( $r = .492 \sim .615$ )。以上のことから、仮説1「対人不安と自己没入は正の関係である」を支持しており、対人不安が高ければ自己没入も高くなることが示唆された。すなわち、そのことは自己の容姿や振る舞いなど他者から観察されうる側面の公的自己意識の高さが対人不安に関係しており、他者からの注意を敏感に感じることでその場から逃げたいなどの反応を持つようになるのではないかと考えられる。

次に性別では、図2、5より男性が女性に比べ相関が高いことが示された (男性： $r = .599$ ； $.615$ ，女性： $r = .487$ ； $.492$ )。この結果は、高間ら(2002)の先行研究とは異なっていた。そのことはおそらく、社会福祉を学ぶ学生の特性やサンプル数の不足が関係していることが推測されるが今後さらに検証していく必要がある。

学年別では、図3、6より1年生と4年生において相関が高くなっている (1，4年生： $r = \sim .632 > 2$ ，3年生： $r = \sim .566$ )。新しい環境になり新たな人間関係を構築する1年生と就職など自己の現実的な将来に直面する4年生においては、他者からどのように思われているのか強く意識するようになり、他者からの評価を自己に取り入れやすいのではないかと考えられる。また、2年生以上において学年が上がるごとに、対人不安と自己没入の相関が高くなっている ( $r = .513 \rightarrow .611$ )。そのことは専門的学習展開の中での臨床実習の影響があると予想される。実習の講義や実践を通して自分自身を振り返るようになり、単なる机上の知識を理解するだけに留まらず、自分の行動や振る舞いが適切であったかどうかを内省しやすくなっていくことが反映しているものと考えられる。

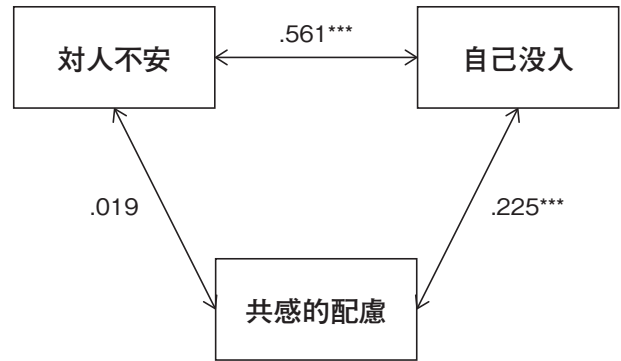


図1 各変数の相関分析の結果

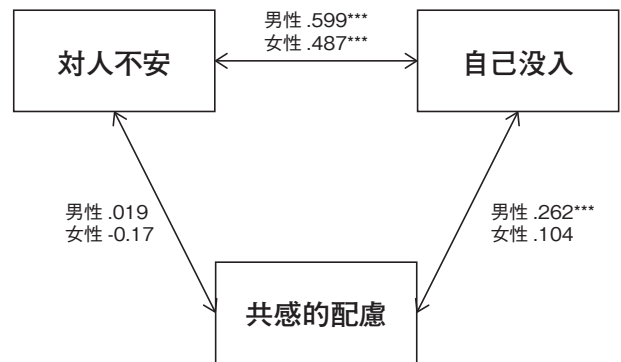


図2 性別における各変数の相関分析の結果

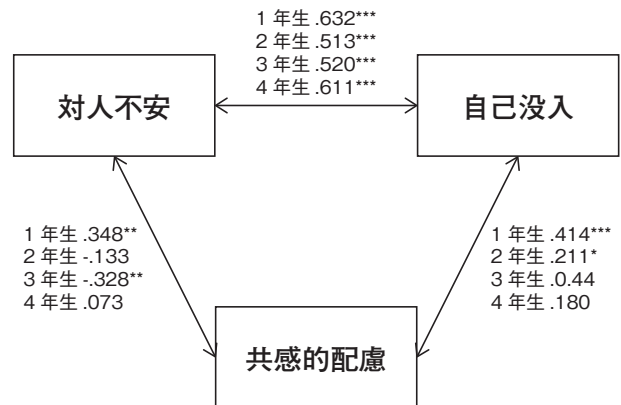


図3 学年別における各変数の相関分析の結果

#### 2. 相関分析と偏相関分析から見た自己没入と共感的配慮の関係

図1～3の相関分析の結果より、自己没入と共感的配慮に関して、全体及び男性において0.1%水準 ( $r = .211 \sim .262$ )、2年生は5%水準で弱い正の有意な相関 ( $r = .211 \sim .262$ )、1年生では0.1%水準で中程度の正の有意な相関が見られた ( $r = .414$ )。また、図4～6の対人不安の影響を統制した偏相関分析の分析結果では、2年生においては弱い正の有意な相関から中程度の正の有意な相関となっており、相関が強くなる結果となった ( $r = .211 \rightarrow .528$ )。以上のことから、仮説3「自己没入と共感的配慮は負

の関係である」を支持しておらず、自己没入が高ければ共感的配慮も高くなることが示唆された。すなわち、そのことは自己を客体として認識し、自己注目をしている状態である公的自覚の高まりが関係していると考えられる。公的自覚が高まると自分を良く見せたいという意識が高まるため、相手に共感することで自分を良く見せようとしているのではないかと考えられる。

性別では男性にのみ正の有意な相関が見られた。男性は自己に対する周囲からの反応に敏感なため、自己没入状態に陥りやすいことが考えられる。そのため、周りに無理に合わせようとするが、それに対し不一致感を抱いているのではないかと推測される。

次に学年別では1年生、2年生に正の有意な相関が見られた。大学に入学したばかりの1年生や専門的知識が少ない2年生においては、専門的共感の姿勢が獲得できていないため、独自の共感の姿勢で他者と関わっているのではないかとと思われる。しかし、共感しながらも他者からの評価が気になるため、自己没入につながっているのではないかと予想される。その一方、学年が上がると自己没入と共感的配慮の間に有意差が見られなくなった。学年が上がると、次第に他者との関係が構築されていくため徐々に自分に合った関わり方で接することができるようになり、周囲に対しての敏感さが緩和されていくのではないかと推測される。また、学年が上がると、知識と技術の獲得が増加し、その中に共感性も含まれるだろう。共感性が高くなると他者が求めるものに反応しやすくなり、そのことが対人援助をする上での重要な視点の獲得につながっていくと推測される。

### 3. 相関分析と偏相関分析から見た対人不安と共感的配慮の関係

図1～3の相関分析及び偏相関分析の結果より、対人不安と共感的配慮に関して、全体において有意な相関は見られなかった。しかし、1年生は1%水準で弱い正の有意な相関 ( $r = .348$ )、3年生は1%水準で弱い負の有意な相関が見られている ( $r = -.328$ )。また、図4～6の自己没入の影響を統制した偏相関分析の結果では、全体及び男性にほとんど相関はないが5%水準で有意差が見られるようになり(順に  $r = -.133$ ;  $-.178$ )、2年生では1%水準で弱い負の有意な相関 ( $r = -.287$ )、3年生では1%水準で中程度の負の有意な相関が見られ

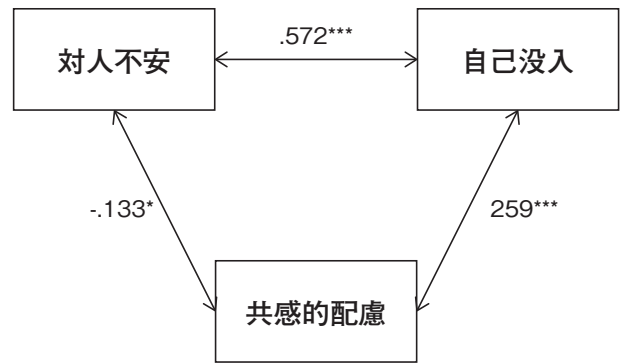


図4 各変数を統制した偏相関分析の結果

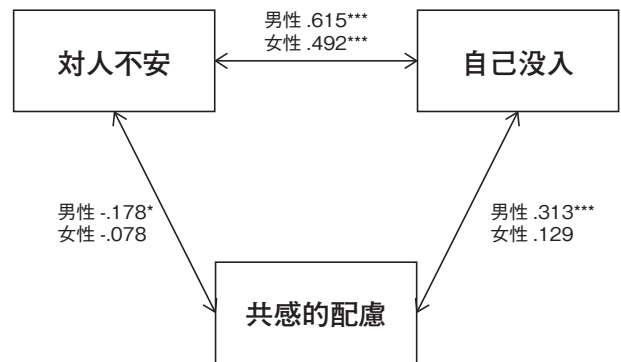


図5 性別における各変数を統制した偏相関分析の結果

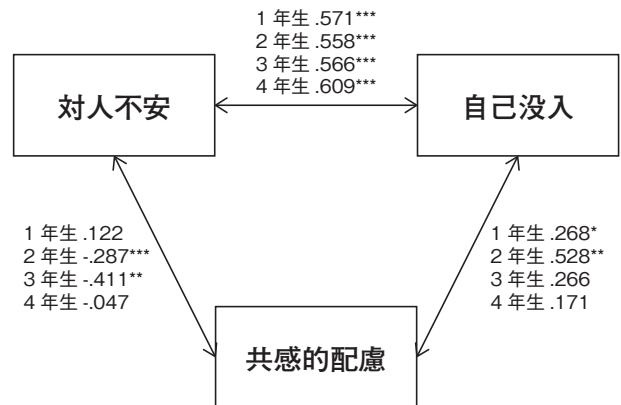


図6 学年別における各変数を統制した偏相関分析の結果

た ( $r = -.411$ )。これらのことから、1年生においては仮説5「対人不安と共感的配慮は正の関係である」を支持しているが、2年生及び3年生においては仮説を支持していない結果となった。すなわち、1年生においては対人不安が高ければ共感的配慮も高くなることが考えられるが、2年生及び3年生においては対人不安が高ければ共感的配慮が低くなる、あるいは対人不安が低ければ共感的配慮が高くなることが考えられ、学年によって違いがあることが示唆された。

1年生において正の有意な相関が見られた要因として、生活環境の変化があると推測される。1年生は大学に入学したことで、新しい環境で新たな人間関係を構築しなければならない。対人関係を構築し、周囲に適応するためには、他者に共感する姿勢が必要になり、また他者を知る努力が求められるため共感性が高くなるのではないかと予想される。しかし、1年生は共感をすることで対人不安を引き起こしている可能性があるとも考えられる。今回調査を行った6月の段階では、1年生は他者との親密な関係が構築できていないため、共感しながらも不安や緊張を持続しており、対人不安が高まっていったのではないかと推察される。それに対し、2年生及び3年生において負の有意な相関が見られている。学年が上がると専門的学習の中でグループワークやロールプレイの機会が増加し、また実習を通して外部の人とも関わるようになる。そのような経験や実践を重ねることで、対人場面に対しての慣れが生じてくるのではないかと予想される。その上、社会福祉及び対人援助職に関する専門性を学習することによって、対人援助職にとって必要である共感性が身についていくと同時に対人不安が低減していくのではないかと予想される。

#### 4. 重回帰分析から見た対人不安と自己没入の因果関係

以下は図7～9の結果から考察を行う。重回帰分析の結果より対人不安と自己没入に関して、全体及び性別、学年別の全てを通して対人不安と自己没入は0.1%水準で双方向の正の有意な影響が見られている ( $\beta = .368 \sim .638$ )。このことから、仮説2「対人不安と自己没入は正の関連がある」を支持しており、対人不安が高くなることによって自己没入が促進され、また、自己没入が高くなることによって対人不安が促進されることなどが示唆された。

河野ら(2007)の研究で、「対人不安が高い人は、他者から見られていることを自覚し、自己に対して注意を向けること(自己注目)で不安が高まっている」ことが報告されている。本研究においてもこのような公的自己意識や公的自覚が対人不安に影響を与えていることが推測される。

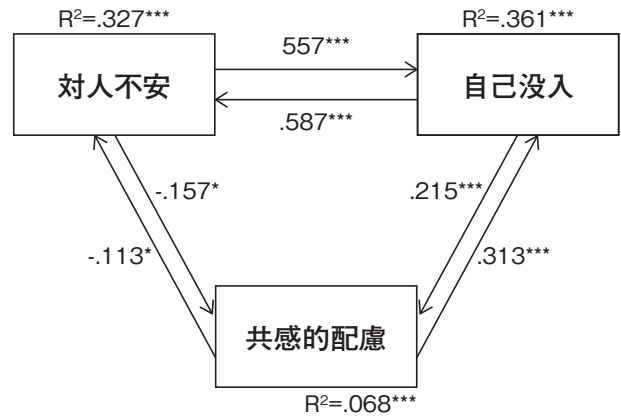


図7 各変数を従属変数とした重回帰分析の結果

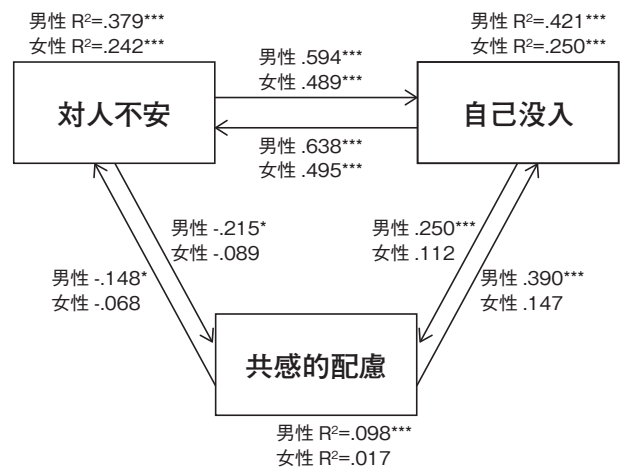


図8 性別における各変数を従属変数とした重回帰分析の結果

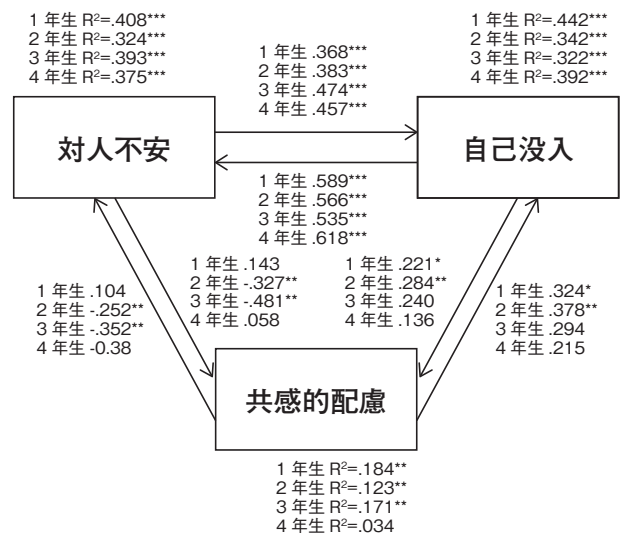


図9 学年別における各変数を従属変数とした重回帰分析の結果

## 5. 重回帰分析から見た自己没入と共感的配慮の因果関係

図7～9の重回帰分析の結果より自己没入と共感的配慮に関して、全体及び男性において0.1%水準で双方向の正の有意な影響 ( $\beta = .215 \sim .390$ ), 1年生及び2年生において自己没入と共感的配慮は5%水準及び1%水準で双方向の正の有意な影響が見られた ( $\beta = .221 \sim .378$ )。このことから、仮説4「自己没入と共感的配慮は負の関連がある」を支持しておらず、自己没入が高くなることによって、共感的配慮が促進され、また、共感的配慮が高くなることによって、自己没入が促進されることが示唆された。

自己没入と共感的配慮の間には公的自覚や自己開示の関連が考えられる。森田ら(2014)の研究において、「親しい同性の友人に対し、自分の弱い部分をさらけ出すことで自分が相手からどのように見られているか気にする視点と、自分の言ったことが相手を傷つけることにならないかという不安や心配の気持ちがあるために、自己開示が抑制される」ことが報告されている。すなわち、自己開示をすることで自分が他者からどのような評価を抱かれているのか、他者を傷つけていないかなど自己の振る舞いを気にするようになる。そのため、そのような不安を回避するために共感性を高め、自己開示を減少していることが推測される。

次に性別で男性のみに正の有意な影響が見られた要因として性役割の違いが考えられる。榎本(1997)は、「男性は育ちの中で強くなればならず、弱音を吐くことを禁じられ、他者と競争的であることを奨励される」と述べている。男性は他者に対して自分をよく見せなければならないという意識が強く働くため、他者に対して共感的配慮は働くが自分の深いところを開示することができず、そのことがより自己注目を促し、自己没入状態を強めているのではないかと考えられる。

学年別で1年生及び2年生において正の影響が見られたことについて、低学年は他者との関係性が希薄であり、そのため自己没入状態を誘発しやすいのではないかと予想される。他者との関係の構築のため、共感的姿勢を示しながら関わるが他者からの評価を気にすることが推測された。

## 6. 重回帰分析から見た対人不安と共感的配慮の因果関係

図7～9の重回帰分析の結果より対人不安と共感的配慮に関して、全体及び男性において5%水準で双方向の負の有意な影響 ( $r = -.113 \sim -.215$ ), 2年生, 3年生において対人不安と共感的配慮は1%水準で双方向の負の有意な影響が見られた ( $\beta = -.252 \sim -.481$ )。このことから、仮説6「対人不安と共感的配慮は正の関連がある」を支持しておらず、対人不安が高く(低く)なることによって、共感的配慮が抑制(促進)され、また、共感的配慮が高く(低く)なることによって、対人不安が抑制(促進)されることが示唆された。橋本(2000)の研究で、「浅い関係を好み、気遣いをするのが精神的健康の低さや対人ストレスを高める」ことが報告されている。表面的な付き合いの中で共感的姿勢を見せるが、そのことが対人場面に対する負荷をかけていることが予想される。そのため、対人場面への負荷が続くと、気遣いすることに疲れていくのではないかと推測される。

また、性別では男性に負の有意な影響が見られたことについて、鈴木(1991)の研究で、「女性は要領よく付き合いを切り替えることができるのに対し、男性は親友であっても深刻な相談をしなければ、深い関わりしないとといった他者と距離を取る傾向がある」ことが報告されている。そのため、男性は表面的な関わりをする傾向が見られ、他者に対して情緒的な反応をすることは少なく、また、男性は対人場面そのものを避けようとする傾向が推測される。

次に学年別で2年生, 3年生に負の有意な影響が見られたことについて実習の存在が関係していると考えられる。2年生, 3年生は実習に関する講義や実践が増加するため、対人場面への慣れや共感性の獲得につながったのではないかと推測される。

## 7. 対人不安下位項目が自己没入及び共感的配慮に影響を及ぼしているか検討した結果

対人不安と自己没入及び共感的配慮の間の相関関係、因果関係が以上の結果から明らかとなった。その上で、対人不安と自己没入及び共感的配慮をより分析するために、対人不安下位項目のどの項目が自己没入及び共感的配慮に影響を及ぼしており、また自己没入及び共感的配慮がどの対人不安下位項目に影響を及ぼしているのか共分散構造分析の結果を用いて考察を行っていく。

初めに対人不安下位項目が自己没入及び共感的配慮に影響を及ぼしているかについてである。初めに全ての因果関係を繋いだ共分散構造分析を行い、その後、モデル適合度が上がるように有意差が見られないところからパスの削除を行った。削除した項目は8項目であった。

修正を行った結果、 $\chi^2=21.566$ ,  $df=9$ , 有意確率  $p<.01$ ,  $GFI=.981$ ,  $AGFI=.926$ ,  $CFI=.986$ ,  $RMR=.021$ ,  $RMSEA=.072$ ,  $AIC=75.566$  となった。 $GFI=.981$ ,  $AGFI=.926$ ,  $CFI=.986$ はどの値も1に近く、データの当てはまりがよいという結果になるため、このパス図は適合性が高いと判断し、これを採択した。有意な結果が見られるパスのみを記入したパス図を図10に示す。

<自分や他人が気になる>悩み及び<生きることに疲れている>悩みは自己没入に対して0.1%水準で正方向に有意な影響が見られた(順に  $\beta=.454$ ; .284)。

<自分や他人が気になる>悩みとは、「自分のことを評価する他者及び他者に評価される自己へのとらわれがもたらす不安意識」のことである。調ら(2002)によると、「対人不安意識が高い場合、相手が自分をどう思っているのか強く意識しており、否定的評価を受けることで相手に嫌われてしまった

のではないかと気になり、その場だけで忘れることができずにその気持ちをひきずってしまう」と報告されている。すなわち、対人不安意識が高い人ほど他者からの評価を強く意識しており、自己を肯定的に評価する程度が低く、否定的な他者評価を取り入れやすいことが示唆される。他者が自分のことをどのように思っているのか気になり、他者や対人場面に対して不安が高まる。そのため、自分の振る舞いや行動が適切であるかどうか自己を振り返りようになることが自己没入状態を促進することに繋がっているのではないと思われる。以上のことから、<自分や他人が気になる>悩みから自己没入に対し、正の影響を及ぼしているのではないかと推測される。

次に<生きることに疲れている>悩みである。<生きることに疲れている>悩みとは、「生への充実感が持てず、抑うつ的になり、心身の不調を感じる」といった悩みである」のことである。そのため、この悩みは将来への不安や学習面の不安、生活の不安など対人不安以外の要因を含んでいる場合があるため、一概に対人不安からの影響であるとは言えない。堀井(2011)は、「対人関係で不安が高まり、人との関係に過剰な意識が注がれると、それに伴い気疲れを起こし、心身の不調を訴えたり、生きることへの充実感を損ねたりする者もいる」と報告している。すなわち、過剰な対人意識を行った結果、生活に対

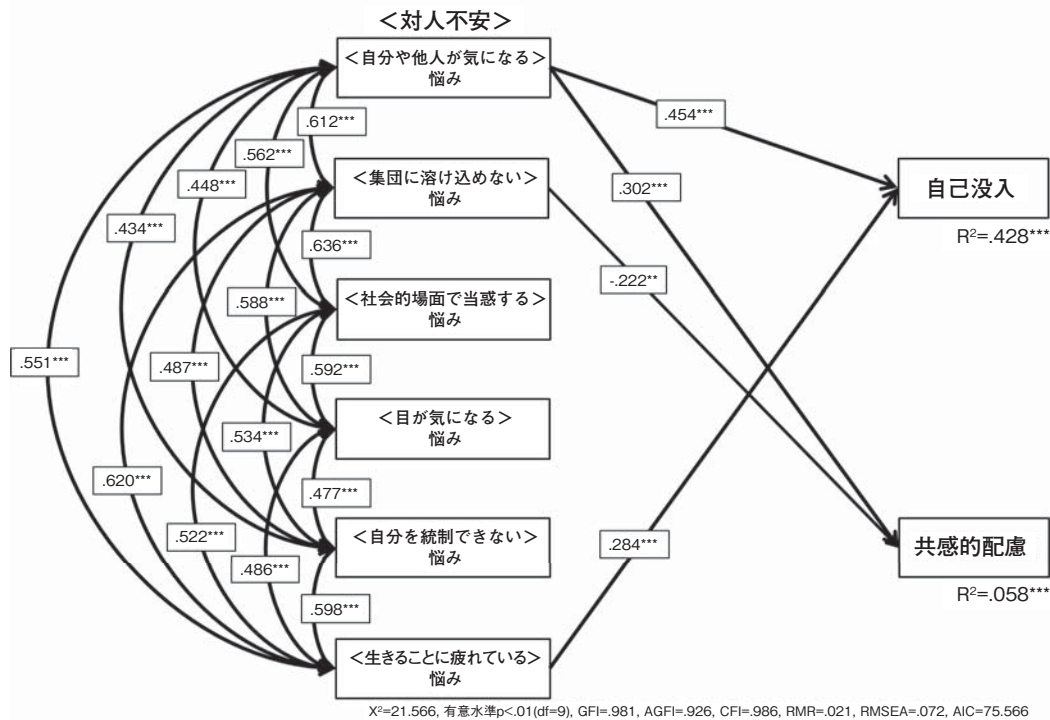


図10 対人不安下位項目が自己没入及び共感的配慮に影響を及ぼしているか検討した結果

して充実感を持つことが難しくなることで自己没入に陥りやすくなるのではないかとと思われる。

次に共感的配慮について考察を行う。＜自分や他人が気になる＞悩みは共感的配慮に対して0.1%水準で正方向に有意な影響 ( $\beta = .302$ )、＜集団に溶け込めない＞悩みは共感的配慮に対して1%水準で負方向に有意な影響が見られた ( $\beta = -.222$ )。

＜自分や他人が気になる＞悩みは共感的配慮に対しても正方向に有意な影響が見られた。それは自分を良く見せようとするため、周りに合わせようとし、共感性が高くなっているものと推測される。それに対して＜集団に溶け込めない＞悩みは、共感的配慮に対して負方向に有意な影響が見られている。＜集団に溶け込めない＞悩みとは、「集団に対する違和感や不適合感を表し、集団という対人場面に溶け込んで自由かつ適切に振る舞えないという不安意識である」のことである。大学ではゼミやロールプレイ、サークルなど集団で行う場面が多いと思われる。集団に溶け込めない悩みが高くなると、集団の中いることが苦痛になり、自分の殻に閉じこもってしまうことが考えられる。そのような状態になると、周

囲に対して配慮をできなくなり、共感性は減少していく危険性があるものと考えられる。

以上の結果より、＜自分や他人が気になる＞悩みと＜生きることに疲れている＞悩みが対人不安の中でも自己没入に強く影響を与えており、共感的配慮に関しては＜自分や他人が気になる＞悩みや＜集団に溶け込めない＞悩みが影響を及ぼしていることが考えられる。

## 8. 自己没入及び共感的配慮が対人不安下位項目に影響を及ぼしているか検討した結果

初めに全ての因果関係を繋いだ共分散構造分析を行った。その後、全ての因果関係を繋いだ結果から、モデル適合度が上がるように有意差が見られないところからパスの削除を行った。削除した項目は3項目であった。

修正を行った結果、 $\chi^2 = 513.441$ ,  $df = 18$ , 有意確率  $p < .001$ ,  $GFI = .576$ ,  $AGFI = .153$ ,  $CFI = .458$ ,  $RMR = .543$ ,  $RMSEA = .320$ ,  $AIC = 549.441$  となった。適合度を上げるため、パスを削除する等工夫を重ねたが、 $GFI$ ,  $AGFI$ ,  $CFI$  とも目安である

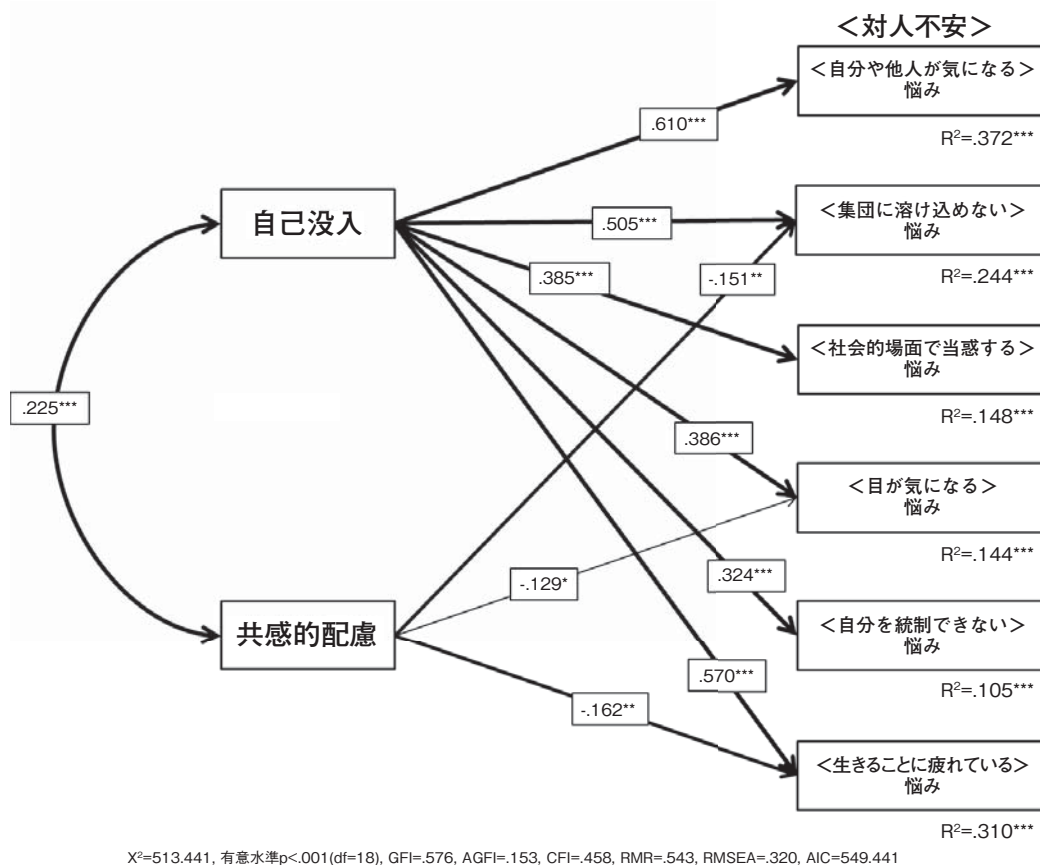


図11 自己没入及び共感的配慮が対人不安下位項目に影響を及ぼしているか検討した結果



0.90には届かず、またRMSEAも0.10を上回った。モデルの設定に課題を残す結果となったが、このモデルを採択することとする。有意な結果が見られるパスのみを記入したパス図を図11に示す。

次に自己没入及び共感的配慮がどの対人不安下位項目に影響を及ぼしているのかについて考察を行う。自己没入において対人不安下位項目全てに0.1水準で正方向の有意な影響が見られた ( $\beta = .324 \sim .610$ )。自己没入は対人不安下位項目全体に影響を与えていることが示唆された。

その中でも、＜自分や他人が気になる＞悩み、＜生きていることに疲れている＞悩み、＜集団に溶け込めない＞悩みの順に中程度の影響が見られた (順に  $\beta = .610 ; .570 ; .505$ )。それらに関しては、前述していたように対人不安下位項目から自己没入及び共感的配慮に対しても影響を及ぼしていた。以上の対人不安下位項目は自己没入及び共感的配慮と双方向で影響しあっていることが推測される。

しかし、共感的配慮については、＜集団に溶け込めない＞悩みと＜目が気になる＞悩み、＜生きることに疲れている＞悩みに1%水準及び5%水準で有意差が見られたが、その影響力としてはほとんどないレベルであった ( $\beta = -.129 \sim -.162$ )。これらのことは、共感的配慮に関しては対人不安下位項目別で見ると際立って影響を及ぼしている項目はないことが示されているものと予想される。

以上のことより、共感的配慮については対人不安下位項目にそれほど影響を及ぼしておらず、対人不安下位項目と自己没入の関係や影響が強いことが推測される。

## 9. 総合考察

対人不安と自己没入に関する仮説1と仮説2は支持される結果となった。この結果は看護学生や看護職者を対象とした研究と同様の結果になった。このことから、同じ対人援助職を目指す看護職、福祉職には共通した特性が見られると考えられる。また、看護及び社会福祉のどちらの職業も他者と関わり、周囲に目を配らなければならない点については共通している。そのため、意識を他者に向くことが増加し、公的自覚が高まっていくことが考えられる。加えて他者からよく見られたいという意識も高まるため、共感的な態度を示すことで自分をよく見せそうとしているのではないかと推測される。このことから、本研究では自己没入と共感的配慮に関する仮説

3と仮説4は支持されない結果となり、自己没入と共感的配慮に関しても対人援助職を目指す学生には共通した特性があると考えてよいのではないだろうか。

一方、本研究では対人不安と共感的配慮に関する仮説5と仮説6が支持されない結果となった。本研究の仮説は看護職者や看護学生の先行研究を参考に設定を行っている。そのため、今回異なった結果が得られたことは対人不安と共感的配慮の関係が看護職者や看護学生と社会福祉を学ぶ学生で異なることが推察される。また、共感に関する概念が看護職者や看護学生と社会福祉を学ぶ学生で異なっているのではないかと考えられるが、このことは今後検討を行っていく必要がある。

高梨(2016)は社会福祉を学ぶ学生の中でも「他者とのコミュニケーションや人間関係の形成を苦手とする学生も少なくない」と述べている。そのため、対人場面や他者に対して苦手意識を持ちつつも、対人援助職を目指している学生もいる現状にあることは事実である。したがって、このような学生らが単に専門的知識や技術を学ぶだけではなく、自分自身の特性や能力を把握し、それに対してどのように対処すべきか、そしてそれらの学生をどのようにサポートしていくかについても研究を進めていくことが大切であると思われる。

## 10. 本研究の限界及び今後の課題

本研究では、対人不安、自己没入および共感的配慮の3要因を取り上げ、分析を行った。しかし、全ての分析を通して女性及び4年生は有意差が見られにくい結果であった。サンプル数の不足なども考えられるが、3要因以外の要因も関係しているかどうか今後検討していく必要がある。

また、本研究は福祉を学ぶ大学生を対象としている。先行研究では看護を学ぶ学生が対象だったが、看護を学ぶ学生と福祉を学ぶ学生にはどのような特性の違いがあるのか今後検討を深める必要があるだろう。また、併せて一般大学生との比較も今後検証していくことが必要である。学生と対人援助に携わる専門職で3要因の関係性が変化するのか、対象者を拡大して研究を行っていくことも課題として挙げていきたい。

## 謝 辞

本調査・研究にあたり、多大なご協力を頂きました西九州大学健康福祉学部の先生方及び学生の皆様には深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) American Psychiatric Association 編, 高橋三郎・大野裕監訳 (2014). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手 医学書院 p831.
- 2) 調優子・高橋靖恵 (2002). 青年期における対人不安意識に関する研究－自尊心, 他者評価に対する反応との関連から－ 九州大学心理学研究 第3巻, p229-236.
- 3) Davis, Mark.H. 著, 菊池章夫訳 (1999) 共感の社会心理学 川島書店
- 4) Davis, Mark.H. (1980, 1983) : 対人的反応性指標<Davis, Mark.H. 著, 菊池章夫訳 (1999) 共感の社会心理学 川島書店>
- 5) 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 6) 橋本剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究 第48号, p94-102.
- 7) 堀井俊章 (2011). 大学生における対人恐怖心の時代的推移 横浜国立大学教育人間科学部紀要. I, 教育科学 第13巻, p149-156.
- 8) 堀井俊章・小川捷之 (1996, 1997) : 対人恐怖心性尺度<松井豊編 (2001). 心理測定尺度集 III サイエンス社 p193-198. >
- 9) 河野芳裕・中西大輔 (2007). 対人不安に影響を及ぼす認知的要因についての研究 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要 第6巻, p90-102.
- 10) 森田美雪・井上直子 (2014). 大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連－親しさの違いと性差に着目して－ 桜美林大学心理学研究 第5号, p65-74.
- 11) 坂本真士 (1997a). 自己注目と抑うつ of 社会心理学 東京大学出版社
- 12) 坂本真士 (1997b) : 自己没入尺度<山本眞理子編 (2001). 心理測定尺度集 I サイエンス社 p58-63.
- 13) 鈴木淑元 (1991). 現代の青年期における性差について 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 第31号, p99-105.
- 14) 高橋尚子・横田恵子・高間静子 (2003). 看護学生の対人不安と個人の内的属性との関係 富山医科薬科大学看護学会誌 第5巻1号, p105-119.
- 15) 高間静子・圓山祥子・横田恵子・林稚佳子・劉瑞霜・山根節子 (2002). 看護職者の個人の内的属性の対人不安への影響 富山医科薬科大学看護学会誌 第4巻2号, p89-104.
- 16) 高梨未紀 (2016). 社会福祉士養成課程学生の相談援助実習前後の社会的スキル 日本福祉大学社会福祉論集 第135号, p63-75.